

まいいぶん 愛知

特集 ～ 愛知県の中世を掘る ～

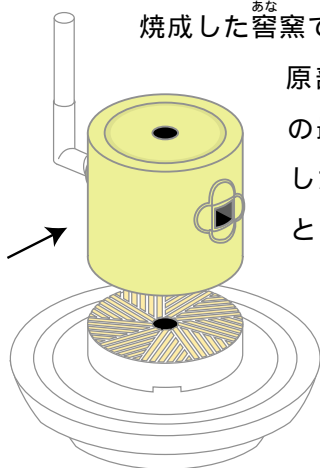
こ ぜ と 古瀬戸の生産と流通

とうせいちゃうす うぐいす 陶製茶臼・鶯窯跡

(瀬戸市岩屋町・鳥原町)

鶯窯跡は14世紀後半から15世紀にかけての施釉陶器(古瀬戸後期)を焼成した鶯窯で、陶製茶臼は灰

原部分、黑色灰層の最下部より出土した。陶製の茶臼としてはこれが初めての出土例で石製の茶臼を忠実に



写したものである。直径14 cm、高さ13.7 cm、重さ5.6 kg、台座文様は四方に半円状の粘土板を貼り付けた蓮弁文である。



* * * *

かいゆうはりつけ ぼ たんもんへい し 灰釉貼付牡丹文瓶子

はち おう し
・八王子遺跡(瀬戸市八王子町)

瓶子は3 × 1.5mの隅丸方形土坑内に横位の状態で出土。残存高18 cm、肩部3ヶ所に牡丹文を配置する。古瀬戸後期の初段階に属すると思われる。頸部を打ち欠いており、蔵骨器かと思われたが骨片などは検出されていない。この瓶子を取り囲んで花崗岩の大型の礫がめぐり、灰釉系陶器碗・皿、縁釉皿(鉄釉)などが共伴する。



水入遺跡と愛知県内の中世墓

どこの集落から来たのだろうか、死者の枕元にともした火からとられた松明を頼りに、三昧聖とともに血縁者だけが、闇にまぎれ、遺体を矢作川の河原に広がる共同墓地に埋葬している。死者が親しい人であっても、隣人はのぞきみるだけで葬送には参加しない。そんな光景が繰り返されていたのが、鎌倉時代の水入遺跡であった。水入遺跡は豊田市渡刈町に所在し、昨年度より第二東名高速道路建設に先立ち、発掘調査が行なわれている遺跡である。

塚の間に放置された遺体（『餓鬼草紙』より）

水入遺跡は矢作川中流域の右岸に広がる低位段丘上に展開する古墳時代中期から中世までの遺跡であるが、江戸時代後半からの頻繁な洪水により2 m以上の砂が堆積し、現在は田畑が広がっているため、近年まで存在が知られていなかった遺跡である。発掘調査の結果、

鎌倉時代には100基を超える墓が作られ、共同墓地として利用されていたことが判明した。この共同墓地は当時水入遺跡の中央部に入り込んでいた入り江より北東側を中心に展開し、大半の墓は土壇墓と呼ばれる地面に穴を掘り、遺体を土葬したもので、棺の痕跡や蔵骨器などは確認されなかった。また、遺体とともに灰釉系陶器の椀や皿、土師器皿、刀子などが副葬されていた。



一般的な土壇墓



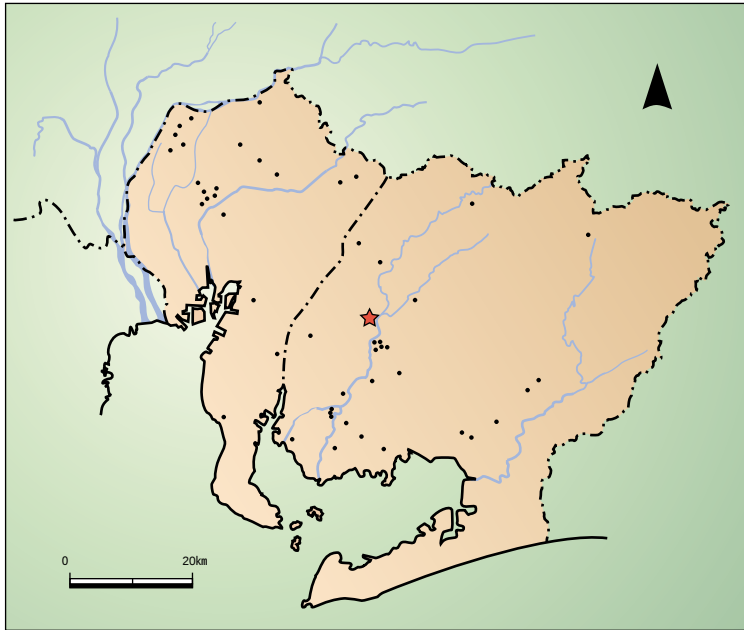
水入遺跡で確認された円形の土壇墓

愛知県内の中世墓は発掘調査による確認、石塔・蔵骨器のみも含め130ヶ所以上におよぶ。水入遺跡以外でも、近年発掘調査増加しており、各方面から行われている。それによれば、中世墓とするかは詳らかではないえられる。この時期は家的性格のものが中心で、単に近接して作られることが土葬による土壇墓が盛行情勢後半からは集落とは隔

査による中世墓の確認事例は研究により分析が進められ墓の初源（何をして中世が）は、12世紀後半と考先祖をまつる「屋敷墓」独もしくは数基が屋敷多い。この場合の葬制する。その後、13世紀絶された丘陵上など



青磁椀が副葬された土壇墓



発掘調査の行われた中世墓＜星印が水入遺跡＞

あった。このことは12世紀末に成立した絵巻物『餓鬼草子』の描写や、12世紀前半に成立した『今昔物語集』をはじめとする中世の説話集に記される。同様に、非血縁者だけでなく、貧困なものの多くも葬儀すら出せなかったことも文献資料から窺い知ることができる。さらに、変死をとげたもの、殺害・戦死・事故死・妊娠中の死・自殺など、も中世前期には埋葬せずに放置されることが多かった。但し、死霊が祟りを起こさぬよう、その場に霊をとどめるため、石や柴をつみあげたという（これは放置された遺体の見苦しい様子をかくすために行なう行為であったと考えられ、後の集石墓の起源とされる）。そして、葬儀や墓地の管理に従事するのが、三昧聖や非人と呼ばれた人々であった。それゆえ彼らの活動の場がその名の通り、三昧＝墓地（中世前半は塚原、後半では墓原と呼ばれたらしい）となり、丘陵上や河原がその地である事が多い。しかし、近世のように集落単位の形態をとるのではなく、周辺村落の共同墓地として埋葬が行なわれていた。

* * * *

水入遺跡で確認された中世墓を考えた場合、土壌墓の大半が円形に掘られているということ、成立が13世紀初頭、その存続期間が鎌倉時代に限定されること、すべて土葬による土壌墓で火葬墓が1基も確認されていないこと、など他の共同墓地の発掘調査事例との相違点も多く見られ、比較検討を十分しなければならない点が多い。それ以上に中世の葬制のあり方に照らし合わせた場合、まさに水入遺跡の土壌墓群は河原に作られた周辺村落の共同墓地であり、中世惣村に見られる惣墓もしくは郷墓的な性格であった可能性が高い。この点を踏まえ水入遺跡周辺の中世集落のあり方を考えた場合、水入遺跡より上流は矢作川の川幅が狭まり、地形的に境界を作り出し、下流には沖積地が広がり、自然堤防上に天神前遺跡、郷上遺跡などの中世集落が展開する。これらの遺跡は、水入遺跡の中世墓を媒介として地域的まとまりを持っていたことが想定され、このことは各遺跡の性格を理解する上での重要な視点になりうる。これは水入遺跡周辺に限ったことではなく、中世墓の解明はそれを取り巻く中世集落理解のための一視点といえるのではないだろうか。（埋文セ 川井啓介）

松河戸遺跡の屋敷墓
(12世紀後半)



ちかしな遺物^{いぶつ}

No. 1

あさ ひ

朝日遺跡出土の朝鮮系無文土器

今回は、朝日遺跡から出土した「朝鮮系無文土器」について紹介しましょう。蒲鉾のような断面形の口縁と小型でやや長胴の胴部、そして土器の表面をナデ調整するといった特徴をもつ朝鮮系無文土器は、文字通り朝鮮半島に由来する土器で、朝鮮半島により近い北部九州からは直接運ばれてきた土器が出土しますが、今回紹介する朝日遺跡出土の朝鮮系無文土器は、朝日遺跡周辺で作られた土器のようです。その証拠に、本来土器の表面はナデ調整で仕上げるはずなのに、朝日遺跡出土の無文土器はハケ調整されています。そして、西日本で出土するものに比べ器壁が厚く重量感があります。愛知県内では初の出土例として注目される資料です。

(埋文セ 永井宏幸)



オマケ！ 弥生時代の宝石箱

土製合子の蓋がみつかりました！

以前紹介した朝日遺跡出土の赤彩された土製合子です。生き別れとなっていた合子の蓋が今回の整理でみつかり、復原も終了しました。“弥生時代の宝石箱”とするにふさわしいこの合子の中には何が入っていたのでしょうか。



ごあいさつと編集後記

この春4月1日をもって、(財)愛知県埋蔵文化財センターが(財)愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センターに改組されたこととあわせて、これまで56号を数えた「埋蔵文化財愛知」も、「まいぶん愛知」として新たに生まれ変わりました。この名称には、これまで「埋文愛知」が目指してきた方向性を受け継ぎつつ、より多くの方との接点を得たいという意図が込められています。



今回の記念すべき号では、古瀬戸、中世墓と中世を主題にして編集してみました。やや高度な内容に仕上がりましたが、今後、多くの方のご意見を拝聴し、斬新な企画を用意したいと考えています。

まいぶん 愛知 No.57

発行 平成11年5月31日
編集 (財)愛知県教育サービスセンター
愛知県埋蔵文化財センター
〒498-0017
愛知県海部郡弥富町前ヶ須新田野方802-24
TEL 0567-67-4163 FAX 0567-67-3054
印刷 クイックス